

## 4. 2年保育3年保育5歳児事例

上田 ますみ

○5歳児 V (Ⅳ) 期

友達とつながりを感じながら、自己の力を十分に発揮して生活に取り組んでいく時期

<キーワード>

・交渉 ルール 相手の気持ち

<この事例を選んだ理由>

E児はこれまで、自分が欲しいものがあると相手の思いを考えずに持っていくということを繰り返していた。しかしこの時は女兒らを相手に交渉して自分の欲しいものを手に入れている。また、F児は遊具を使う時のルールをもとにやはり女兒らに交渉している。そしてその交渉を女兒らが受け入れている。これらの姿から、幼児らの育ちを感じたのでこの事例を取り上げることにした。

事例1 マルチパネの基地づくり

7月8日(水)

テラスでA児、B児、C児、D児がマルチパネで家をつくり遊んでいた。つき組保育室では、E児、F児がやはりマルチパネで基地をつくらうとしていた。しかし、E児らはマルチパネを3枚しか持っておらず、つくりたいものがつくれず困っている様子だった。教師はその後E児がどうするか見届けようと思い、その近くで様子を見守った。

E児 「ぼく、お金持ちになったら、おもちゃ買ってあげるから、マルチパネ頂戴。ぼく強いし、困ったことがあったら助けてあげるよ」

E児の言葉を聞き、テラスのマルチパネの家にいる女兒らは笑っている。E児がマルチパネをもらえず困っていると、F児が

F児 「マルチパネ、背の高さより高く積んでいるよ。ルール守ってないよ」  
と言った。その言葉を聞き、A児が自分たちと、E児らのマルチパネを見比べたり、自分達のマルチパネの家の高さを自分の背の高さと比べたりし始めた。

B児 「背の高さ、超えてないよ」

A児 「横の所が超えてる……。E児君たち3枚しかない。3枚だと何もつくれないよね。1枚あげようよ」

他の3人もA児の言葉を聞き、納得したようだ。自分たちの家のマルチパネを1枚はずし、E児らの所に持って行った。

D児 「ここも(横の反対側)背の高さ超えてる」

A児 「これも、はずそう」

E児らの所にはずしたマルチパネを持っていき、

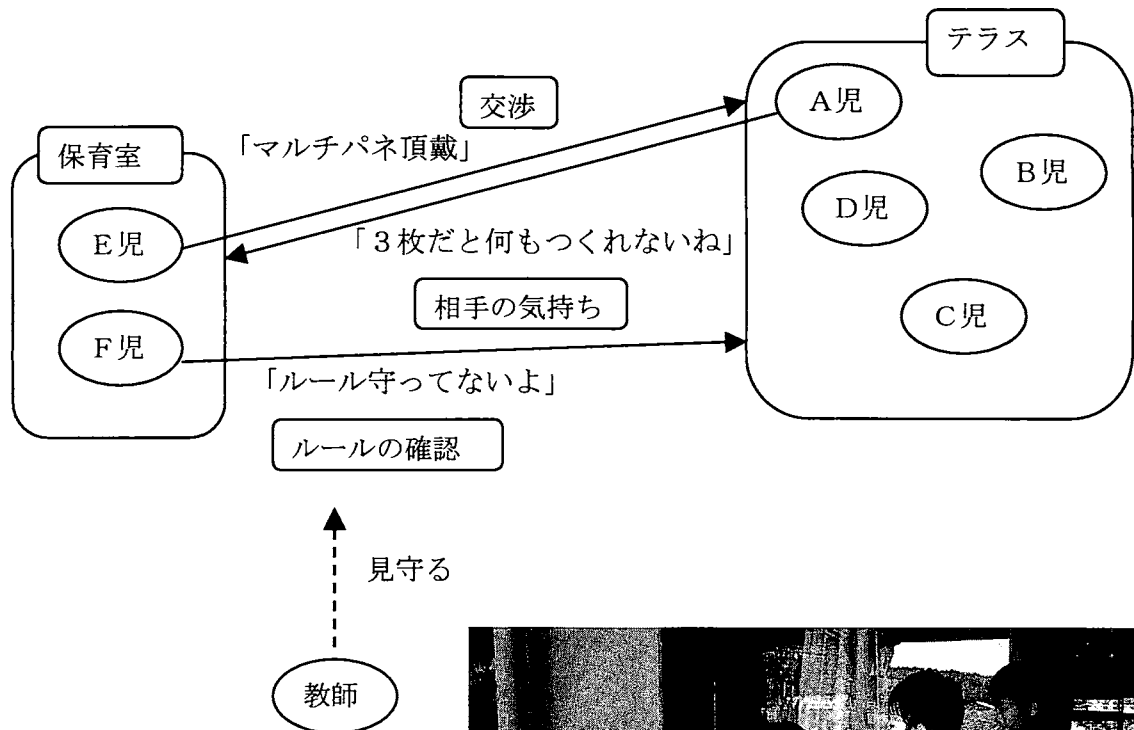
A児 「ここに付けるといいよ」

E児 「ありがとう。これで、ぼくも基地がつかれる」

F児 「うん。つかれるね」

E児とF児は少ない枚数ではあるが、満足そうに基地づくりを始めた。

## <かかわり>



## <考察>

### (1) この事例からわかる学び

#### ①遊具を使用する時のルールを共通理解している

F児の「マルチパネ、背の高さより高く積んでいるよ。ルール守ってないよ」という言葉かけに対して、自分達の背の高さと、自分達がつくったマルチパネの家の高さを比べ、ルール違反を認めている女兒らの姿から、マルチパネを使う時のルールが幼児らにしっかり共通理解されていることがうかがえる。集団の中で遊ぶ時にはこのように同じ認識で理解しているルールが存在していることが不可欠である。マルチパネを使う時のルールは、4歳児の時マルチパネを使って遊ぶ経験を十分に積んできたことから身に付いたものである。ルールを共通理解することは、教師から教え込むだけではなく、遊びの中で体験を通して、そのルールの必要性をしっかりと理解していくことが必要であると考えます。

## ②相手の遊びを尊重し、交渉する

上述したように、以前のE児は自分が遊びに必要と思うものを相手の思いを考えずに無理やり自分のものにするということを繰り返していた。しかし、その都度教師がE児の思いを受け止めたり、みんなのものを使う時にはどうすればよいかなどを具体的に繰り返し教えてきたことで、そのような行為は減ってきていた。この事例では、自分はマルチパネを欲しいけど、女兒らが使っていることをしっかり認識し、E児なりの方法で、相手に自分も使いたいということを伝えている。

このように、相手の遊びを尊重し、その上で、自分の思いを伝えていくことは、協同して遊ぶようになるために必要な経験の一つであると考ええる。

## ③相手の困っている様子がわかる

この事例ではE児やF児だけでなく、マルチパネを使い満足して遊んでいる女兒らのかかわりにも注目すべき点がある。それは、E児らがマルチパネを3枚しか持っていないということに気づき、マルチパネ3枚では立体的なものがつくれないということを相手の立場に立って考えていることである。これは、自分達もこれまでの遊びの中でマルチパネを使いこなし、その特性がわかり、それを使って遊ぶ楽しさを十分に感じているからであろう。

4歳児の時からもものじっくりかかわってきたことが、友達とかかわる力の育ちにもつながっていることがうかがえる。

## (2) 教師の援助・環境構成

### ①自由自在に扱えるマルチパネ

4歳児の時にはものと丁寧にかかわることを大事に保育を進めてきた。その中で、幼児らはそのものの特性を体で理解している。また、それがみんなの共通のものとなっている。幼児らにとり、自由自在に扱うことができるマルチパネの遊びであったことが、同じものを使って遊んでいる他の友達の思いを大事にしたかかわりを生み出したと考える。

### ②状況の展開を見守り、メッセージを発する教師の存在

事例からわかるように、教師は直接幼児らのかかわりに関与していない。しかし、その展開をそばで見守る援助をとっている。それは、これまでの活動の中で築いてきた教師と幼児らの関係性において、教師がその場に居ることで、幼児らが自分自身でどうすることがよりよいか考えてほしいというメッセージを発していることが幼児らに伝わっているからである。また、教師はこの場では直接関与することはなくても、このような姿や行為の良さをクラス全体に伝えるという援助をしていくことも大切であると考ええる。

5歳児の遊びの場において教師は、「後ろから見ているよ」というまなざしが伝わるような存在でありたい。

## (3) 今後に向けて

クラスや学年の全員が共通理解して使える言葉やルールを幼児らと一緒につくったり、増やしたりしていく。また、遊びの場における幼児らの具体的な言動を集団の場で評価する機会をもち、みんなの学びとする。そして、そのことを継続していく。

## ○5歳児 V（Ⅳ）期

友達とつながりを感じながら、自己の力を十分に発揮して生活に取り組んでいく時期

### <キーワード>

様々な感情体験 葛藤 自己・他者評価

### <この事例を選んだ理由>

のびのびフェスティバル（運動会）を終えた次の週、園庭ではのびのびフェスティバルの種目を再現した遊びが所々で展開されていた。G児、D児、A児、H児、C児らはリレーをしようとしていた。しかし、チーム分けがうまくできず、リレーにならない日が続いていた。チーム分けをする時に、じゃんけんをしてチームを分けようとするのだが、同じチームになりたい友達と同じものを出すので、なかなか決まらないようだった。その状況をなんとかしようと、G児が家で家族と相談し、割りばしの先に赤と青の色をつけたくじ引きをつくってきた。しかし、それでも、このリレーはうまくいかなかった。

自分達の力でチームを分ける時に、一人一人が自己評価や他者評価をしたり、様々な感情を体験したりしている姿が見られると思い、事例として取り上げた。

#### 事例2 「こわいの。負けたくない…でも、リレーやりたい」 9月30日（水）

G児がつくってきたくじ引きでチームが決まった。赤チームはH児、A児、I児、J児、青チームは、D児、C児、G児、K児になった。

I児 「そっち、速い人ばかりや」

H児 「そうそう、そっち速い人ばかり」

G児 「強いかわからんよ。A児ちゃんやH児ちゃんも強いよ」

じゃんけんとは違い、公平にチーム分けができると思われるくじ引きを使っただけなのに、その結果、できたチームを受け入れたくない子らがいるようだった。それでも、とにかくリレーをしようとなった時に、H児がその場から居なくなってしまった。せっかくくじ引きまでつくってきて、今日こそはリレーがうまくいくと思っていたG児が教師の所にやってきた。

G児 「H児ちゃんが逃げて行ってリレー、できん」

教師 「どうして逃げたの？」

D児 「こっちのチームが速い人ばかりいるとか言って、逃げた」

リレーをしようとしていた子らが集まってきた。その様子に気づき、H児も戻ってきた。

G児 「H児ちゃん、どうして逃げたの？」

H児 「だって、怖い。負けたくないの」と涙を浮かべながら言う。

G児 「のびのびフェスティバルの時、ほし組（私達）、いつも負けてばかりやったがいね」

教師 「リレーって、勝ち負けが決まるよね」

H児 「でも、リレーやりたい。でも、負けたら悔しい」

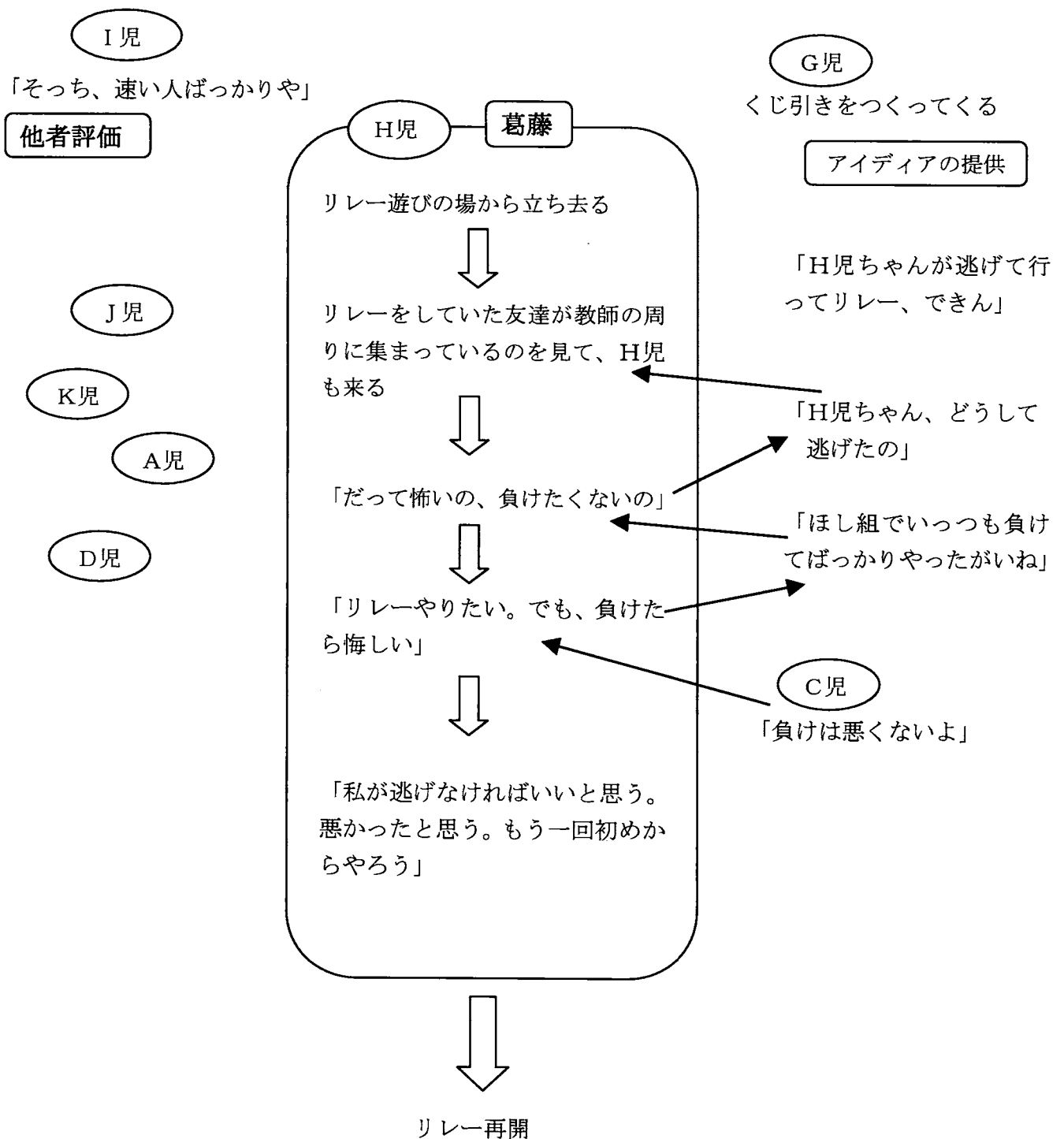
A児、D児、C児、J児は、H児とG児、教師のやり取りを自分の思いと重ね、いろいろな思いを巡らしながら聞いているようだった。

C児 「負けは悪くないよ・・・」

H児 「私が逃げなければいいと思う。悪かったと思う。もう一回初めからやろう」

唐突に言ったH児のこの言葉をきっかけに、まず、このチームでリレーをすることになった。

### <かかわり>



## ＜考察＞

### （１）この事例からわかる学び

#### ①自己や他者の姿を客観的に見ることができる

I児の「そっち、速い人ばかりや」や、G児の「強いかわからんよ。A児ちゃんやH児ちゃんも強いよ」の言葉などから、リレーにおいては自分や友達の走力を客観的に見ていることが読み取れる。そして、速く走ることができるなど、他者を尊重したり、その力を認めたりしていることもうかがえる。このように、自己や他者の姿を客観的に見ることができるということは、友達と協同して生活していくために必要な力の一つであると考ええる。

#### ②混沌とした雰囲気の中に自分を置く経験が不足している

じゃんけんではすっきりチーム分けができないから簡単明瞭にチーム分けができるくじ引きをつくったG児、負けたくないという理由でその場から逃れようとしたり、逃げようとしたにもかかわらず、すぐに「私が逃げなければいいと思う。悪かったと思う。もう一回初めからやろう」とその場を収めようとしたH児、そして、それらの状況に対して自分の思いを表出しようとしないうちの子らの姿などから、混沌とした状況に自分を置くことに慣れていないこの子達の特性が見てとれる。

のびのびフェスティバルのリレーのように初めからチームやルールが決まっている活動は十分に体験してきている。しかし、自分達が進める遊びの中ではスムーズに事が進まないということを体験していることもこの事例からはわかる。行事での体験が経験内容に繋がっていないということである。

### （２）教師の援助・環境構成

#### ①自分の行動を振り返る援助

H児は、自分が望んでいたメンバーのチームになれず、遊びの場から逃げたが、自分からその場に戻ってきた。そして、「だって、怖い。負けたくないの」「でも、リレーやりたい。でも、負けたら悔しい」と自分の本音（弱さ）をさらけ出し、周りの友達の醸し出す雰囲気を感じ、「私が逃げなければいいと思う。悪かったと思う。もう一回初めからやろう」と言うに至った。教師は、この流れから、H児なりに、自分の起こしてしまった行動が思った以上に重大なこととなっていることに戸惑い、葛藤し、どうしたらこの状況が收拾できるかと考えていたと読み取り、H児なりの育ちを評価した。

しかし、事例検討会では、この一連の流れの中にH児の課題が浮き彫りになっているのではないかとことが話し合われた。「私が逃げなければいいと思う。悪かったと思う。もう一回初めからやろう」というH児の言葉は、確かにこの場を收拾しようとする言葉ではあるが、あまりにも短絡的で、自己中心的な解決方法なのではないかという読み取りができる。この流れの中で、教師はH児に対し、「どうして逃げなければいいと思ったのか」「何が悪かったと思うのか」を問い直し、自分の行動をしっかりと振り返らせる援助が足りなかったのではないかと反省させられた。

## ②弱さを受け止めてくれる友達の存在

H児がこのチームでは負けると思い込み、遊びの場から逃げたが、自分からその遊びに戻って来れたことや自分の弱さをみんなにさらけ出せたこと、そして、最終的にリレーに参加できたことは、周りの友達とH児との関係が、H児の弱さを丸ごと受け止めてくれる関係になっているからだ考える。

## (3) 今後に向けて

H児に対しては、「私が逃げなければいいと思う。悪かったと思う。もう一回初めからやろう」と自分から言えたことはH児の育ちを考えると大きな育ちと言えるが、教師はここで、もう一つH児に自分の言動をしっかり振りかえらせる援助をしていく必要があったと考える。「何が悪かったのか」「どうしてそう思うのか」など、具体的に振り返らせる問いかけを行っていききたい。

周りの幼児らには、友達の言動を全て受け入れようとする優しさは評価したい。しかし、遊びの場の状況を壊すような友達の言動については、それに対する自分の思いを自信をもって伝えることができる関係性をつくっていききたい。



## ○5歳児 VI（V）期

友達と共通の目的をもち、力を出し合って生活を進めていく時期

### <キーワード>

共通体験 イメージの共有 役割分担

### <この事例を選んだ理由>

普段一緒に遊ぶことがあまりない、L児、M児、N児、O児、P児、Q児、R児、S児、T児、E児らが、「動物園ごっこ」をしようという同じ目的をもって遊び始めた。動物園をつくるために、互いのしていることを見ながら自分がしなければならないことを考え、活動する姿が見られた事例である。

#### 事例3 動物園ごっこ

11月11日（水）

久々の雨天、戸外で遊ぶことができない。前日までしていた遊びができず、幼児らはみんな新しい遊びをつくり、始めようとしていた。つき組、ほし組、両クラスの朝のつどいで「プレイルームの動物（なかよしウィークで共同製作したもの）を使って動物園をつくりたい」という思いが出てきた。

朝のつどいを終えてプレイルームに行くと、数人の幼児らが集まっていた。「動物園をつくりたい」という思いをもっている幼児らのようだ。メンバーを見ると、いつも一緒に遊んでいる幼児同士ではない。そのためか、それぞれが何からやればいいのか決められないようであった。そこで、教師がその遊びに加わることにした。

教師 「何からつくる？」

P児 「チケット売り場つくる」

M児 「入口の門をつくらなきゃだめだね」

L児 「そうそう、門をつくろう」

教師 「門・・・どんなのをつくる？なんかいいものないかな？」

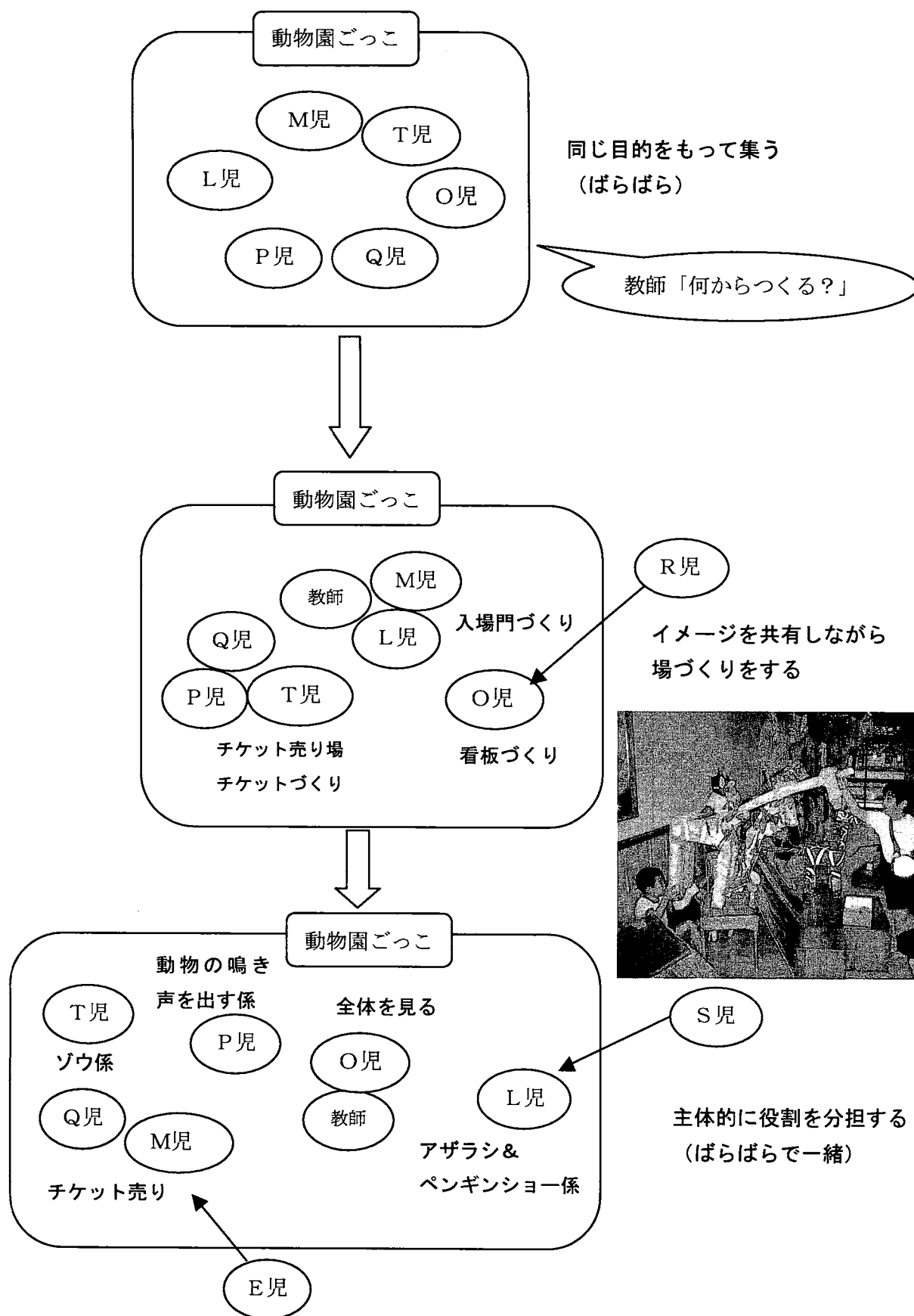
M児 「のびのびフェスティバルの時みたいなのがいいな。牛乳パックでつくれるんじゃない？」

L児 「いいね」

L児、M児と教師は牛乳パックに新聞紙を詰めたものを繋ぎ合わせ、門柱をつくることにした。途中からN児も門柱づくりに加わってきた。その近くでは、P児、Q児、T児が大型箱積み木を組み合わせ、チケット売り場やチケットをつくっている。また、O児は段ボールを切り、入場門につける看板をつくっている。O児のしていることを見て、R児も看板づくりに加わり、O児が文字をかいた周りにR児は動物の絵をかく。このように、相談したわけではないが、それぞれの幼児が友達のしていることを見ながら、自分なりにできることに取り組んでいる。

入場門の場所が決まり、看板を設置する。大人用と子供用のチケットもできた。動物園らしい形ができると幼児らは自分の持ち場を決め、そこですることを考えだした。T児はゾウの所で、お客さんが来たら順番にゾウに乗るお世話をする考えた。P児はライオンやトラの後ろに隠れ、動物の声を出して本物らしくしたいと考えた。途中から入ってきたS児はアザラシとペンギンのショーをやりたいらしい。このようにして動物園づくりは進んでいった。

<かかわり>



## ＜考察＞

### （１）この事例からわかる学び

#### ①いろいろな友達と同じ目的をもって活動する楽しさや充実感

7月「わくわくワールド」（宿泊体験）9月「のびのびフェスティバル」（運動会）10月「なかよしウィーク」（縦割り活動）と園の中心となり行事に取り組んできた。そこで、いろいろな友達と同じ目的をもって活動する中で、楽しさを味わったり、充実感を感じたりしてきた。

#### ②みんなで一緒に取り組む活動の中で自分の役割を担う経験

上記の活動の中で、「わくわくワールド」ではグループごとに、「のびのびフェスティバル」では一人一役を担う経験をした。また、3歳児から5歳児が縦割りで生活し、いろいろな活動に取り組んだ「なかよしウィーク」では自分より小さい友達をリードしたり、助けたりする役割を全員が担ってきた。

#### ③共通の体験

「なかよしウィーク」では秋の遠足として『いしかわ動物園』へ行った。また、遠足に行く前から『ふぞく動物園をつくろう』という目的をもち、遠足に参加した。そして、その後、それぞれのグループが選んだ動物を共同製作した。

### （２）教師の援助・環境構成

#### ①幼児らの意識を焦点化する言葉かけ

幼児らは、「動物園ごっこをしたい」という同じ思いで、プレイルームに集っては来たものの、何から始めればよいかわからない様子であった。そこで、教師は遊びをつくっていく時にまず必要な遊びの場づくりに幼児らの意識が向かうような言葉かけをした。そのことで、幼児らは自分がすべきことを見つけ、遊びがスムーズにスタートした。

#### ②幼児らに扱いを任せられる素材の提供

牛乳パック、新聞紙、段ボールなど、これまで遊びや活動の中で十分に使いこなしてきた素材を提示した。幼児らはそれらの特性を十分にとらえているので、自分がつくりたいものを主体的につくることができたと考える。

#### ③「なかよしウィーク」につくった動物の利用（意図的活動と自らつくりだす遊びとの連動）

当初は動物を共同製作して展示することが目的であった。しかし、その動物への幼児らの思い入れが教師の予想を超えて大きかった。意図的活動の充実が、幼児らの遊びをつくりだす大きな力となっている。

### （３）今後に向けて

この事例のように、幼児らがそれぞれの関係性の中で生み出される役割分担、つまり「自分は何を担うとこの遊びはよりよく楽しくなるか」を考え、見つけ、活動するということを十分に体験していくことが必要であると考え。このような体験を積み重ねていくことで今後の表現会や修了式に一人一人が主体的にかかわり、みんなで協同して取り組むことにつなげていきたい。

## ○5歳児 VI（V）期

友達と共通の目的をもち、力を出し合って生活を進めていく時期

### <キーワード>

見通しをもつ 支えてくれる仲間

### <この事例を選んだ理由>

本園では5歳児が中心となって行事をつくりあげている。園生活最後の学芸的行事であるのびのび表現会は、5歳児が役割を担ったり、自分達で様々なことを相談して決めたりする部分が最も多い行事である。この事例はその中の劇に取り組む姿である。5歳児の劇は創作劇であり、ストーリー、配役、台詞や動きなど、劇をつくっていく様々なことを幼児らが決めている。そのため、劇そのものはもちろん、一人一人の自分の役割に対する思い入れはとても大きい。

この事例では、一人一人がその子らしい姿を見せながら、自分達がつくってきた劇をやり遂げようとしている。見通しをもって真剣に取り組む姿や、支えてくれる仲間がいるからできるということを体験しながら学んでいる様子が垣間見られる。

事例4 「僕、できない・・・じゃあ、台詞教えてくれる？」

2月9日（火）

のびのび表現会の本番も二日後に迫ってきた。この日は幼稚園全体で、本番通りのプログラムで練習を進行することになっていた。

5歳児創作劇「わんぱくだんのタイムトラベル」のわんぱくだん役の子が三人欠席であることが分かった。この劇は、わんぱくだん役になりたい幼児が多く、そのため、わんぱくだんは四人1グループで2つのグループが途中で交代し、演じることにしようと幼児らが決めた。幼児らの決めたことからすると、前半に出る役の子が一人、後半に出る役の子が二人欠席なので、誰かが代役として、前半も後半も出なければならないということになる。そこで、わんぱくだん役の幼児らを集めて、欠席の友達がいることを伝える場をもった。

教師 「今日、Y児君とZ児君とW児君がお休みなんだけど、劇の時どうする？」

教師のその言葉を聞き、幼児らに一瞬、緊張が走った。

U児 「僕、後半だから前半のY児君のところもでるよ。やってみる」

N児 「じゃあ、Z児君とW児君のところはV児君とX児君、お願い」

V児 「わかった」

X児 「え、できない」

U児 「でも、やらないと、劇できないじゃん」

X児 「だって、なんて言えばいいか、わからないし、できない」

U児 「じゃあ、どうする？」

X児 「僕、できない」

Q児 「でも、X児君がやらないと・・・わんぱくだんの劇にできないよ」

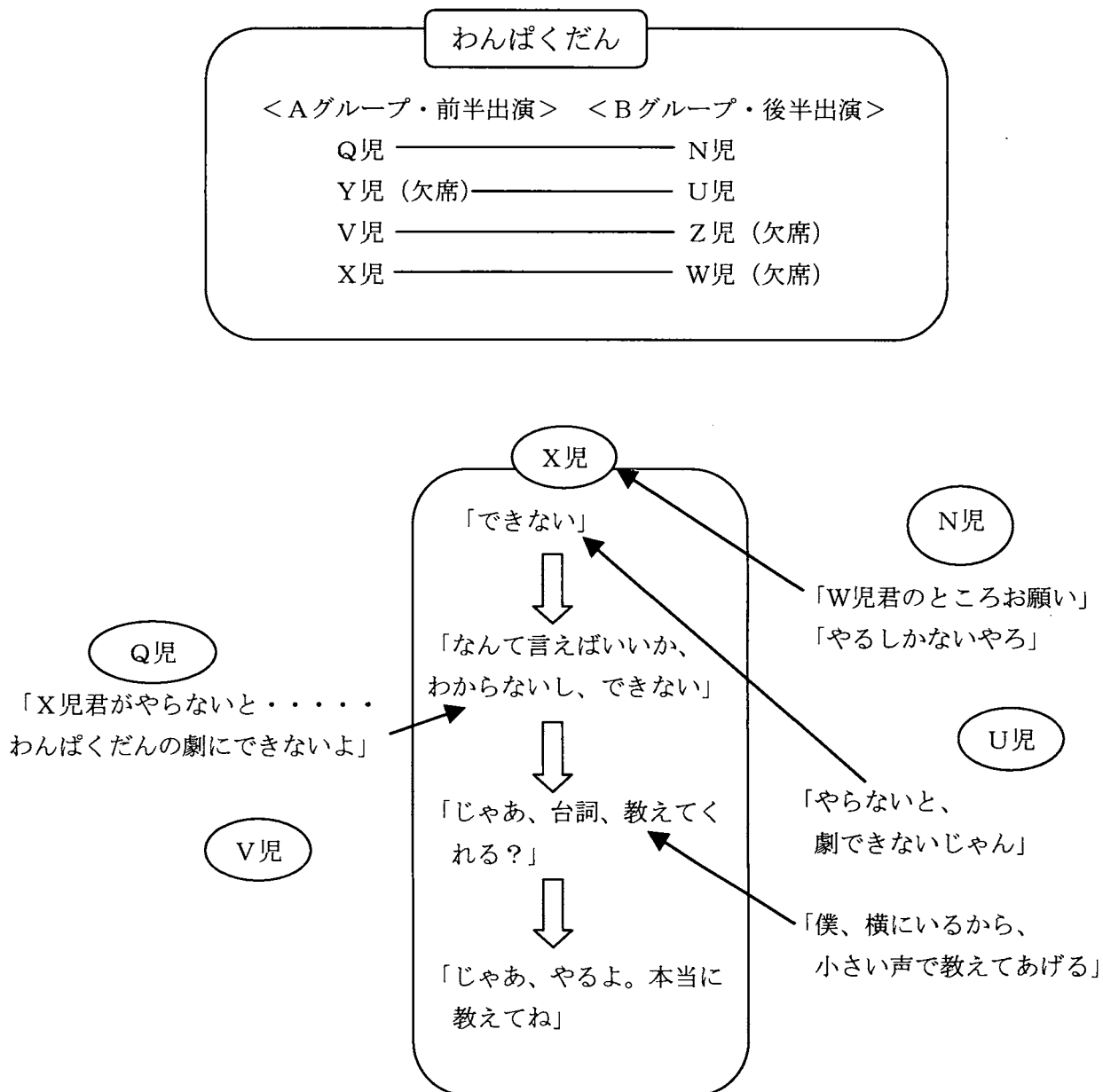
そう言われても、X児はなかなかやると言わなかった。

教師 「劇どうするの？できる？」

N児 「やるしかないやろ」  
 X児 「じゃあ、台詞、教えてくれる？」  
 U児 「いいよ。僕、横にいるから、小さい声で教えてあげる」  
 X児 「じゃあ、やるよ。本当に教えてね」  
 U児 「うん。大丈夫だよ」  
 教師 「X児君、がんばってね」  
 X児 「うん」

リハーサルが始まり、自分の出番を終えたX児はいつもとは違い、W児の出番の準備をしっかりと確かめ、出番を待っていた。そして、X児はしっかりとW児の分も演ずることができた。

### <かかわり>



## ＜考察＞

### （１）この事例からわかる学び

#### ①支えてくれる友達がいる喜び（X児の学び）

これまでのX児はどちらかというと、自分が不得意なことはしたくないという思いを通してきた。みんなの前で表現することや、覚えて表現することもあまり得意ではない。周りの状況に合わせて行動しようという意識も低い様子が見え始める幼児である。しかし、この事例では、X児が不得意とすることをやらなければならない状況の中に置かれることとなった。初めは、「僕、できない」と言っていたX児である。この時のX児は自分の役割を担うことで精一杯であったのだろう。しかし、同じ劇で同じ役割を一緒に演じてきた仲間の言葉やその場の雰囲気から、友達が自分を必要としている、助けてくれるということを感じ取り、不安ではあるがやってみようという意欲につながっていった。その結果、実際にやり遂げることができた。ここで、X児は自分を支えてくれる友達がいる喜びを感じたであろう。そして、できないと思っていたことができたことはX児に大きな自信を与えたであろう。X児を動かしたのは、X児を支えてくれる友達の存在があったからであると言える。

#### ②見通しをもって活動する大切さ（周りの幼児らの学び）

教師の「今日、Y児君とZ児君とW児君がお休みなんだけど、劇の時どうする？」という問いかけに対し、「僕、後半だから前半のY児君のところもでるよ。やってみる」と自分が何とかしなければならぬと思い、すぐに自分がすべきことを考えているU児や「じゃあ、Z児君とW児君のところはV児君とX児君、お願い」と、劇を進めるためにはどうするかを全体的な視点で考えているN児、また、その言葉を聞き、自分と全体を考えているV児らの言動からは、今、自分が置かれている状況を全体を見通し、考えることができる育ちが見え始める。また、「できない」というX児の言動から、自分のことばかりではなく、「ここではもめてはいられない」と自覚し、X児を何とか説得し、みんなでこの状況を乗り切ろうとしている姿からも、全体を見通すことの大切さをこれまでの活動の中で学んできていることが読み取れる。

### （２）教師の援助・環境構成

#### ①幼児らがつくりあげていく行事

上述したように、本園は5歳児が中心となって行事をつくりあげている。行事に向けての活動はそれ自体に、友達と同じ目的に向かって取り組むということを経験せざるを得ない状況を生み出す要素が含まれている。しかし、単に言われたことをやらなければならないという形での取り組みでは、幼児らの育ちを保障する活動は生み出されないと考える。計画的に進めてきた保育をもとに、一人一人のこれまでの学びを踏まえ、幼児らに委ねる部分を考え、環境構成していくことがポイントである。

## ②幼児らが置かれている状況に気づかせる援助

5歳児後半になってくると、自分達は今何をしなければいけないか、また、自分達のしていることを時間的な流れの中で見通しをもち、その流れの今はいつなのかということをつかめることができる幼児が多くなっていく。そこで、この事例のように、子ども達にとって予期せぬことが起きたことを幼児らにそのまま伝え、その時に幼児らが置かれている状況に気づかせ、どうすることがよいかということを考える場を幼児らに委ねていくことが育ちには欠かせない。その繰り返しがいろいろな状況を自分達で乗り越える学びに転化していくと考える。

## (3) 今後に向けて

この事例に見られるように、全体のことを考え、自分達が今どういう位置にいるかを捉える力を小学校教育につなげていきたい。



## <一年を振り返って>

### 1. 協同して遊ぶ姿における学びについて

#### (1) 友達とのかかわりにおける学び

4歳児の時は、気の合う友達としたい遊びをしながら、相手にも思いがあることを知ったり、思いを伝えあったりすることなどを学んでいる。また、いざこざを通して相手と自分の思いの違いに気づき、その違いを認めることで関係性が深まっていく。そのような生活を経た5歳児では友達とのかかわりが深まり、他者性を意識した新たな学びが生まれる。相手が困っていることに気づき、自分達が使っている遊具を譲ったり、相手の遊びを尊重した上で交渉したりといった様子からは、**他者を尊重したり、他者の心情を把握すること**を学んでいると言える（事例1）。また、「〇〇ちゃんは速く走れる」「〇〇ちゃんより自分の方が速く走れる」など、**自分や他者のことを客観的に見ることができるようになってくる**（事例2）。そうすると、**弱さを互いにカバーし合うこともできるようになってくる**（事例2）。

このように、友達とのかかわりが深くなることで、単に楽しむだけでなく、自分とは違う他者のことがわかってくる。協同して生活する時には、他者を尊重したり、自分や他者を客観的に見たりすることは必要な学びとなっていると考える。

#### (2) 自分の役割を担う責任

5歳児の生活の特徴の一つに、「園の行事などに向けて、いろいろな活動に取り組みながら生活する」ことがある。特に5歳児後半の幼稚園生活では、行事に向けての取り組みの中で、一人一人が場の状況を理解したり、状況に応じて**自分がしなければならないことに責任をもって取り組んだりできるようになる**（事例4）。

そのような取り組みの積み重ねが、協同して生活することにつながっていくのだろう。

#### (3) 総合的に学ぶことについて

行事に向けて取り組む中での幼児らの学びは上記のように大きい。行事に向けての取り組みは、枠組みや出発点、ゴールが幼児らにも分かりやすい。しかし、そこでとどまるのではなく、その取り組みが、自分達がつくる遊びにどう活かされているか（活用されているか）を見ていく必要がある。

例えば、事例3は「縦割り活動」でつくった動物を使用し、新しい遊び（動物園ごっこ）をつくっていった事例である。その遊びの様子から、自分達がつくった動物への思い入れが教師の予想を超えて大きかったことがうかがえた。また、**共通の体験をしている連帯感**がこの動物園ごっこの遊びの充実につながっていると考える。

行事へ向けての取り組みなど、集団で取り組まなければならない活動の充実が、幼児らが次の遊びをつくりだす原動力となっている。

## 2. 環境の構成と教師の援助について

### (1) 環境構成

#### ①幼児らが使いこなせる遊具や素材

事例1では、ものの特性だけではなく、使い方のルールがみんなの共通のものとなっていることが重要であることが分かった。また、事例3からは、牛乳パック、新聞紙、段ボールなど、幼児らの力で十分に**使いこなせる素材**を提示したことが、幼児らがつくりたいものを主体的につくる姿につながるということを再確認できた。

#### ②弱さを受け止めてくれる友達の存在

ある幼児が、一度、遊びの場から逃げたにもかかわらず、自分からその遊びに戻って来れたことや自分の弱さをみんなにさらけ出せた事例2から、**自分の弱さを受け止めてくれる友達の存在**が一人一人の幼児らにとり、大きな意味をもつことが分かった。日ごろの保育を通して、集団の中にそのような関係性を築いていくことも、協同的に生活していく集団づくりにはかせないと考える。

#### ③自分達でつくりあげていく行事

本園では、5歳児が中心となって行事をつくり上げている。事例4では、行事に向けての取り組みの中で起きた問題に対して、自分達でなんとか解決しようとする幼児らの姿が垣間見られる。それは、幼児らの中に行事だからやらなければならない、やらされているという意識ではなく、**自分達でつくっている行事である**という意識が位置づいているからこそ見られた姿であると考ええる。

### (2) 教師の援助

#### ①自分の行動を振り返らせる

幼児らの遊びの中で起きるいざこざなどの大部分は、そのことが起きた時の状況を語らせる中で、**自分自身の行動を振り返らせる**ことで、自己解決に至る場合が多い。それはここにあげた事例だけではなく、毎日の保育を通して実感している。また、遊びの場における幼児らの具体的な言動をその場だけでなく、集団の場で取り上げる機会をもち、**自分達の行動を振り返らせる場をもつ**ことを継続していくことも5歳児には大事である(事例1)。

#### ②幼児らの置かれている状況に気づかせる

5歳児後半になってくると、自分達がしていることは、『始まりは～で、今はこんな状況で、今後どうなっていくか(どうしたいか)』というように、一連の見通しをもって物事をとらえることができるようになってくる。子ども達にとって予期せぬことが起きた時に、その状況を乗り越えるためには、①の援助と共に、**自分達が置かれている状況に気づかせる援助**が有効である(事例4)。

### (3) 今後に向けて

協同的に遊ぶ姿を大事にしながら、幼稚園で総合的に学んできたことが、小学校の生活や学習場面にどのように活かされていくのかという視点をもちながら幼小の連携を考えていく。

5歳児 V期 友達とのつながりを感じながら、自己の力を十分に発揮して生活に取り組んでいく時期

1. キーワード 相手の思いを汲む、みんなで納得する

2. この事例を選んだ理由

わくわくワールド（宿泊体験）の活動をすすめていく中でグループごとに係の仕事をするようになった。しかし、水色グループのY児とオレンジグループのK児が「いわなつかみとオリエンテーリング係」をしたいと言ったまま、2つのグループだけ決まらなかった。周りの幼児が同じグループの友達の思いを大事にしながら活動を進めていこうとした事例である。

(Yは水色グループ、その他オレンジグループ)

3. 事 例

事例1-1 係決め1

6月23日（火）

水色グループとオレンジグループが「いわなとオリエンテーリング係」を希望し、「朝のつどい係」を担当するグループが決まっていなかった。教師が声をかけ、水色とオレンジグループのメンバーが集まり、顔を合わせてそれぞれの考えを聞くことにした。

S児 「どうしてY児君は、いわなとオリエンテーリングにしたいの？言ってごらん？」

同じ水色グループのS児がY児に理由を尋ねた。しかしY児は答えにくそうな顔をして何も言えないでいた。

教師 「Y児くんどうしてだろう。お友達が聞いているよ」

なかなか答えないY児に、S児の口調が少し強くなった。

S児 「Y児くんの気持ちがあるんでしょ。したい気持ちがあるんでしょ」

H児 「言わないとダメだよ」

興奮してきたS児の気持ちを察してか、H児が肩を優しく叩きながら声をかけた。その後、N児、T児、B児らが「一度もしたことがないことをやりたいの？」「みんないわなは獲れるよ」「つき組、ほし組だから、我慢もできるよ」「相談もできるよ」等とそれぞれの考えを伝えたが、Y児は下をむいて何も話すことができなかった。そこで、教師の声かけで、家で考えてきて翌日もう一度話し合いの場をもつことになった。

事例1-2 係決め2

6月24日（水）

翌朝一番に水色とオレンジグループとが集まった。Y児とK児が家で考えてきたことを聞いた。

K児 「いわなとオリエンテーリングがいい」

Y児 「いわなとオリエンテーリングがいい」

周りの幼児は二人の話を真剣に聞いているが、Y児もK児も下をむいてしまった。そこで、教師はY児の母親が書いてきた連絡帳の内容を幼児らに伝えた。

教師 「・・・Y児君は、2つの仕事のうち「いわな」のお仕事がしたいって考えなんだよね」

教師の話を聞き、「いいことを思いついた」とH児が話し始めた。

H児 「じゃあ、『いわなつかみ』と『オリエンテーリング』の仕事を分けて、『いわなつかみ係』と『朝の集いとオリエンテーリング係』にするのはどう？」

教師がホワイトボードにH児の考えを示すと、「それ、いいねえ」「いいんじゃない」などの声が聞かれた。Y児とK児の二人もニコッと笑みを浮かべ頷いた。周りの幼児も納得した顔をしている。

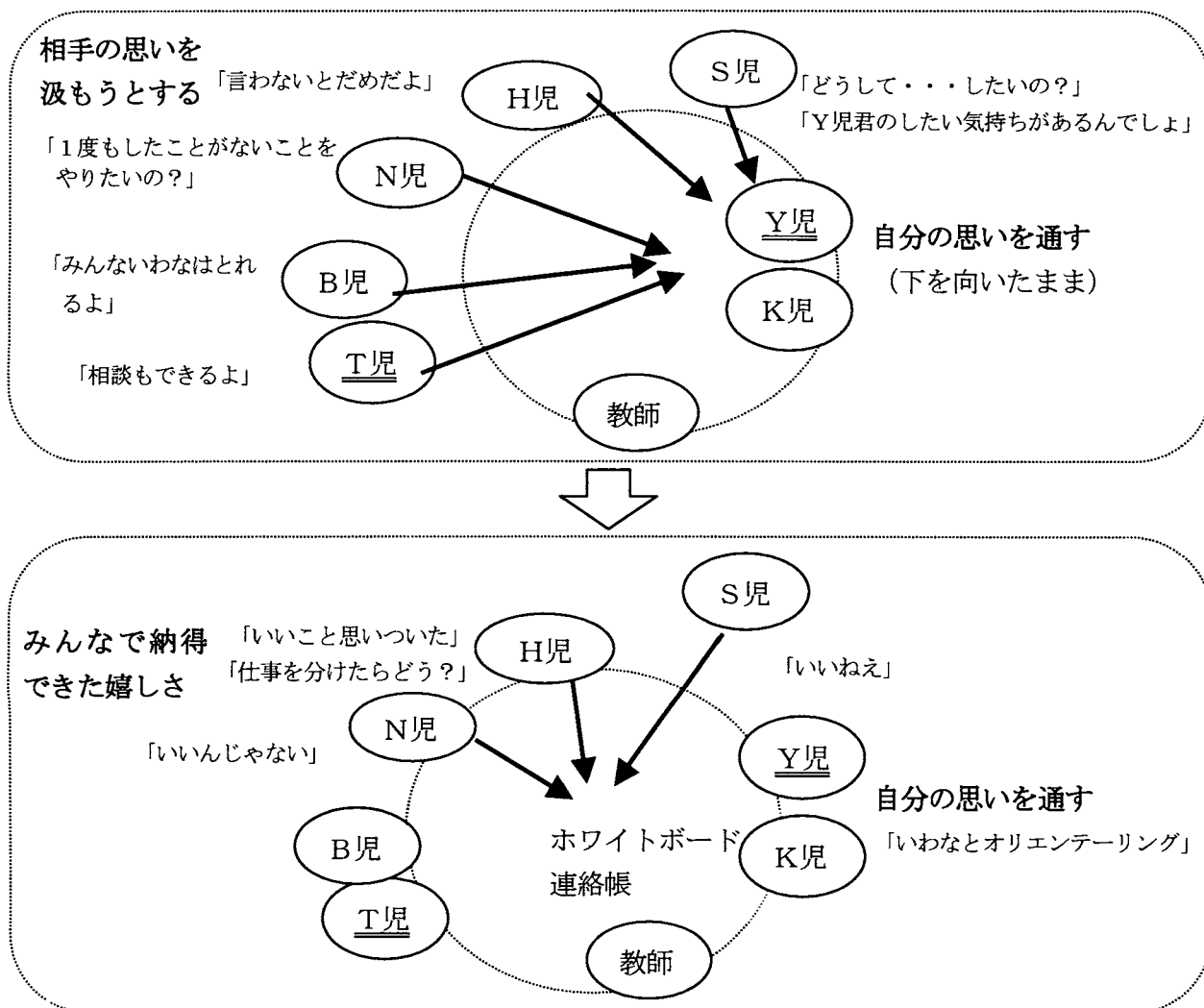
教師 「じゃあ、H児くんの考えを確認するね。・・・・・・でいいのね」

Y児、K児がうなずくと、周りの幼児はやっと決まったというような表情になった。

教師 「お友達の気持ちも考えて、新しいやり方をみんなで考えられたね」

ようやくグループの考えがまとまり、幼児らは満足そうに走って遊びにむかっていった。

#### <友達や教師とのかかわり>



## 4. 考 察

### (1) この事例からわかる幼児らの学び

#### ①思いや考えを出しながら決めることができた嬉しさ

周りにいる幼児らは、Y児、K児、M児が口を紡いでも責めるのではなく、考えを出しやすい雰囲気をつくろうと心がけている姿が見られる。この姿は、これまでのわくわくワールドに向けてリーダー決めなどグループでの話し合いの場でも見られていた。それらは、年少児のときからの生活の中で、教師が気長に、互いの思いを聞く、促す、支える、代弁するなどのかわりをしてきたことがモデルとなっていることが伺える。このようにして、友達の思いを大切にしながらみんなが納得できるように決めることができた嬉しさを学んでいると考える。

#### ②係の仕事や役割に責任をもって取り組む大切さ

年中時の表現会（2月）や、年長になってからのこいのぼりのつどい（5月）で、自分の役割を一人一人がやりきった達成感、満足感を味わう経験をしてきている。そのため、本事例のわくわくワールドについても、どの係の仕事も必要であり、いずれかのグループかがしなければならぬという責任を感じた言葉がけが聞かれる。「どうして・・・」と問いかけたり、N児が理由を推測したり、S児の「つき組、ほし組のお兄ちゃんなんだから、我慢すればいいじゃん」と説得しようとしたりする姿を通して、係の仕事や役割の見通しが共有化され、話し合いの焦点化がされていった。このような友達との話し合いを通して、係の仕事や役割に責任をもって取り組む大切さも学んでいると考える。

#### ③思いや考えを伝え合いながら活動を進めていく難しさ

Y児とK児は、自分の思い通りにならないときに課題と向き合い、よりよくなるように考えを変えていく経験をほとんど積んでいないことが伺える。友達に自分の思いを表現しなかったことで話し合いが進まなかったという状況から、自分の思いや考えを伝える大切さを学んでいると思われる。

### (2) 環境の構成や教師の援助

#### ①思いを伝え合わなければならない状況づくり

わくわくワールドにはグループで活動する時間を多く設けている。そこには、思いを伝え合いながら自分達で活動を進めていって欲しいという教師の願いのもと、教師の意図が込められたグループ編成がされている。水色グループは、それまでの園生活では自分の思いをあまり出さずに友達に合わせて行動することが多く見られた幼児が集まったグループである。オレンジグループは、自分の主張はするのだが、相手の思いや考えを聞いたり受け入れたりするのが苦手な幼児らである。事例の中でも、いつもはあまり話さないS児が積極的にY児の思いを聞き出そうとしたり、N児、T児らはY児の思いを察したりしようとしていた。このように、同質性を重視したグループ編成も活動によっては効果的だと感じた。

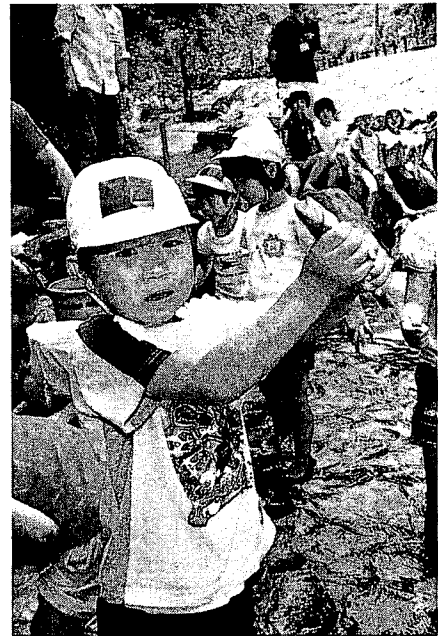
#### ②話し合いの視点の明確化

幼児らの考えが煮詰まってきたと感じられたときに、教師はホワイトボードに問題点を示し理解できるようにした。Y児の思い、K児の思いも視覚的に見えたため、他の幼児にとっては

考える視点が明確になったと思われる。

### (3) 今後にむけて

S児、N児、H児らのように、根気よく友達の思いを察したり、受け止めようとしたりしている姿を認め、他に広めていく。Y児、K児には、自分の思い通りにならない状況に出会ったときにだまってしまうのではなく、自分の思いを相手に伝えることの大切さと、相手や第三者の言うことにも耳を傾けられるように援助していく。



5歳児 V期 友達とのつながりを感じながら、自己の力を十分に発揮して生活に取り組んでいく時期

1. キーワード 遊びへの思い入れ、遊びへの参加の仕方、友達との応答性

2. この事例を選んだ理由

海賊の基地に集ってきた幼児らが、自分の思いを出しながら協力して自動ドアをつくっている。当番活動で遊び始めが遅くなったY児も、友達が何をこの基地で大切にしているのかを察し、自分が何をできるかを考えて遊びに加わることができた事例である。

3. 事 例

事例2 「ね、おれ、どこ手伝ったらいいけ？」

9月28日（月）

園庭の藤棚の下に「本物の基地をつくりたい」というB児の言葉をきっかけに、板や木ぎれを組み合わせた基地づくりが始まった。一週間ほどで基地の外枠をくぎで固定し終え、玄関の扉を自動ドアにしようと相談を始めた。昨日まで一緒につくっていたY児は、この日飼育当番だったため、かなり遅れて基地に入ってきた。

教師 「どんな自動ドアにする？」

B児 「こんな上がったり、下がったりするやつにする」

I児 「いいねえ。こっちをひっぱったら上がっていくのにするってのはどう？」

C児 「おれ、あそこ（製作コーナー）の紐、とってくるわ」

D児 「じゃあ、扉をしぼろう」

C児とI児は紐を取りに行き、B児は扉の高さを測っている。D児は教師と扉を板に縛るための穴開けを始めた。C児とI児が紐を持って戻ってくると、それまで後ろで様子を見ていたY児は、近寄って後ろから声をかけた。

Y児 「ね、おれ、どこ手伝ったらいいけ？」

I児 「ん？ じゃあ、そっち穴開けるの、手伝って」

I児は扉の左上の隅を指さした。Y児はD児がキリで扉の右上隅に穴を開けていることを確認すると「オーケー」と言ってD児の側に移動してしゃがんだ。

D児 「ちょっと待ってね」

D児は自分の開けた穴と紐の太さを比べたり、板の表と裏のぎざぎざの部分を取り去ったりしながら、紐がスムーズに通るように調整した。

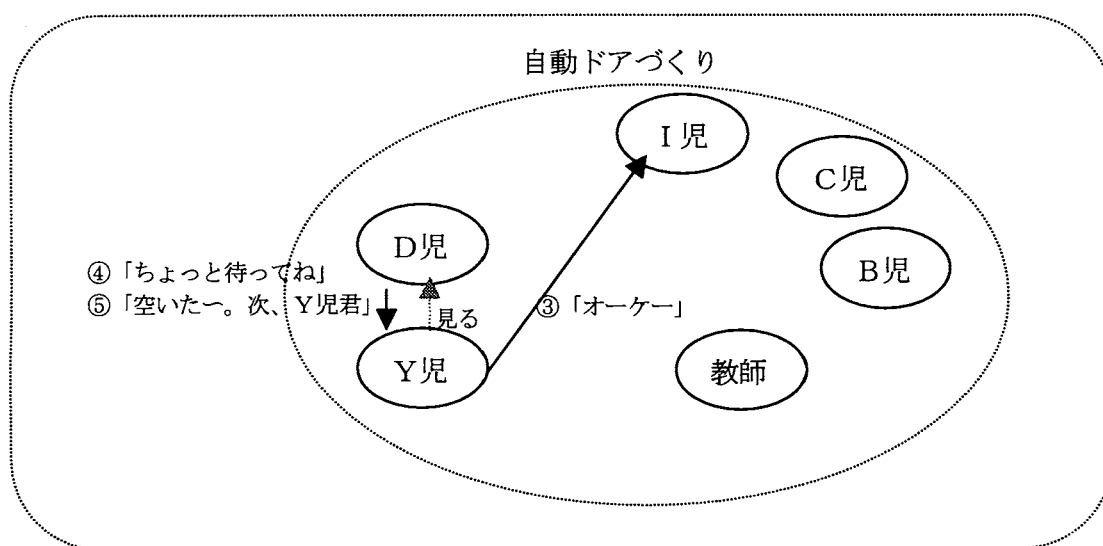
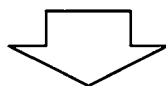
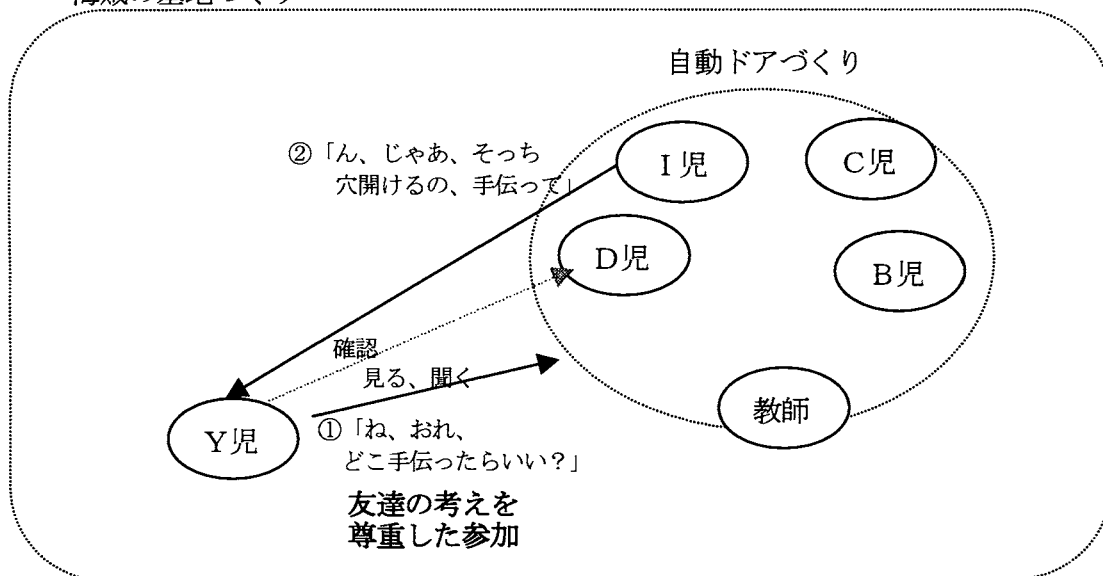
D児 「空いたー。次、Y児君」

D児からキリを受け取ると、Y児も「もっと、穴を大きくせんなん」「裏がぎざぎざになったよー」などと言いながら、扉づくりに加わっていった。



## <友達や教師とのかかわり>

海賊の基地づくり



## 4. 考 察

### (1) この事例からわかる幼児らの経験内容

#### ①友達と力を合わせて遊びの場をつくる楽しさ

Y児はすぐには基地づくりの場に入らずに、先に基地づくりをしていた友達が何をつくろうとしているのかを見たり聞いたりしながら察し、自分がどこをつくればよいかを友達に委ねている。これまで一緒に基地づくりをしてきて、この遊びへの思い入れが大きくなり、友達がつくろうとしていることを大事にしたいという思いを感じた。Y児はこれまで、この基地ごっこを含め製作活動や遊びの場づくりなどにおいて丁寧なものとかかわり、ものを媒介にして友達と一緒に遊びの場をつくる楽しさを感じてきた。これらの経験が、この事例のような遊びへの参加の仕方につながったと思われる。

## ②素材や遊具の組み合わせを考えたり、工夫したりして遊ぶ楽しさ

ここに集った幼児らは4歳児の時に、マルチパネや大型積み木、巧技台などを使って場をつくり遊んできた。遊具に自分達で加工した段ボールなどを組み合わせて遊ぶこともあった。一人では扱うことが難しいものを友達と力を合わせて使う楽しさを十分に味わってきている。それらの経験が、この事例での、応答しながら基地づくりを進めていく幼児らの姿につながっているのではないかと考える。

## ③気の合う友達とイメージを共有して遊びを進める楽しさ

I児、B児、D児、Y児、C児は、いつも一緒に遊んでいるわけではないが、海賊の基地づくりに興味をもち、この遊びが始まってからは毎日集まっている。壁をつくる、隠れ場をつくる、色をぬるなど、その日の基地づくりの目的を決め、遊びをすすめ、一日一日のできあがりと一緒に喜んできた。そのような積み重ねがあり、自動ドアという目的に向けても、一人一人が自分の役割を見つけ、友達と応答しながら遊びをすすめていく姿につながっていると思われる。

## (2) 環境の構成と教師の援助

### ①協力を促す素材

これまで幼児らが扱ってきたマルチパネなどと異なり、基地に自動ドアを取り付けることは、幼児らにとって相当手間と時間のかかる作業である。そのため、くぎで打ちつける、キリで穴を開ける、のこぎりで切る等の作業を、途中で交代しながら行ったり、友達がしているときも両端を押さえてあげたりと、自然に協力する姿が見られた。一人では扱いにくい素材は、友達と遊びの場づくりするためにかかわらざるをえない環境となっている。

### ②魅力的な素材・道具（木工用具・木材）

のこぎり、かなづち、くぎ、柱材、木片、ベニヤ板、ロープなど危険も伴う木工用具・用材を初めて幼児らに提示した。既製の遊具ではない本物の木材を使用できるという素材の魅力は、幼児らの製作意欲を高め、少しずつ出来ていく基地への思い入れも強くなっていった。

### ③道具（木工製作道具）の使い方の提示

教師も一緒につくりながら、目的に応じた安全な使い方を指導し、特に危険を伴うのこぎりのような用具は使い方のルールも話し合って決めた。教師も基地づくりの仲間の一人としてじっくりと場に居続けることで、幼児らは少し難しい製作にも安心して挑戦していた。また、木を切ったり、くぎを打ったりして基地を建てていくことは幼児らにとって大変興味を抱くようであり、そこで教師から示される新しい製作技術は、より一層、幼児らの挑戦したい気持ちを高めることになった。

## (3) 今後に向けて

友達と思いや考えを出し合いながら遊びをすすめていくためにも、友達に自分の思いを伝えたいような遊びの場づくりができるように必要に応じて遊具や素材などを提供し、友達とのかかわりを見守っていく。

## 5歳児 VI（V）期 友達と共通の目的をもち、力を出し合って生活を進めていく時期

### 1. キーワード 感情の共有、友達の思いへの呼応

### 2. この事例を選んだ理由

クラス活動の時間にクラスみんなでドッジボールを行った。ドッジボールというゲームを楽しもうとする幼児、イメージの世界で楽しんでいる幼児などそれぞれであった。試合をしていくなかで、同じチームの友達の考えを受け入れ、やってみて、上手くいったことに対して感情を共有する姿が見られた事例である。

### 3. 事 例

#### 事例3 ドッジボール

11月4日（水）

クラスで行うドッジボールも3回目となった。試合の始め方も手際が良くなり、お互いの代表者がジャンケンをして先攻を決め、ボールタップをして試合が始まった。試合がすすみ、両チームとも2、3人の幼児が当てられて外野にいったときに、内野のA児がボールを手にした。E児は勢いよくボールに寄っていったが、A児が先にボールをとったことを認識し声をかけた。

E児 「今日もしようぜ」

A児 「よーし。ダブルでいこうぜ」（1つのボールを二人で一緒に肩口に持つ）

二人とも得意げな顔になり、二人でボールを抱えてコート中央まで来た。すでに、相手チームは全員後ろの方へ下がってしまっていた。外野ではL児、X児が「こっち、こっち」と声を出してボールを呼んでいる。E児とA児が二人でボールを抱えて投げようとするF児が前に出て遮った。

F児 「待って。ダブルで投げんといて。外野まで届かん」

E児とA児はF児の手を払って投げようとしたが、F児は投げる真似をしたり方向を指さしたりしながら二人に説明した。G児、J児も近づいてきた。

F児 「二人で投げたら、ボールこっちにこうやって転がっていくやろ。だから・・・止めて」

J児 「一人でも投げられるって」

G児 「お願い。外野までパスして」

F児らが真剣に話すのを聞き、ニコニコしながら投げようとしていたE児は真顔になった。

E児 「わかった。A児、おまえ外野まで投げて」

A児はE児からボールを託されると、小さく「わかった」と答え、体をいっぱいに使って外野めがけて投げた。少しそれたものの、外野のL児までボールが渡った。その瞬間、

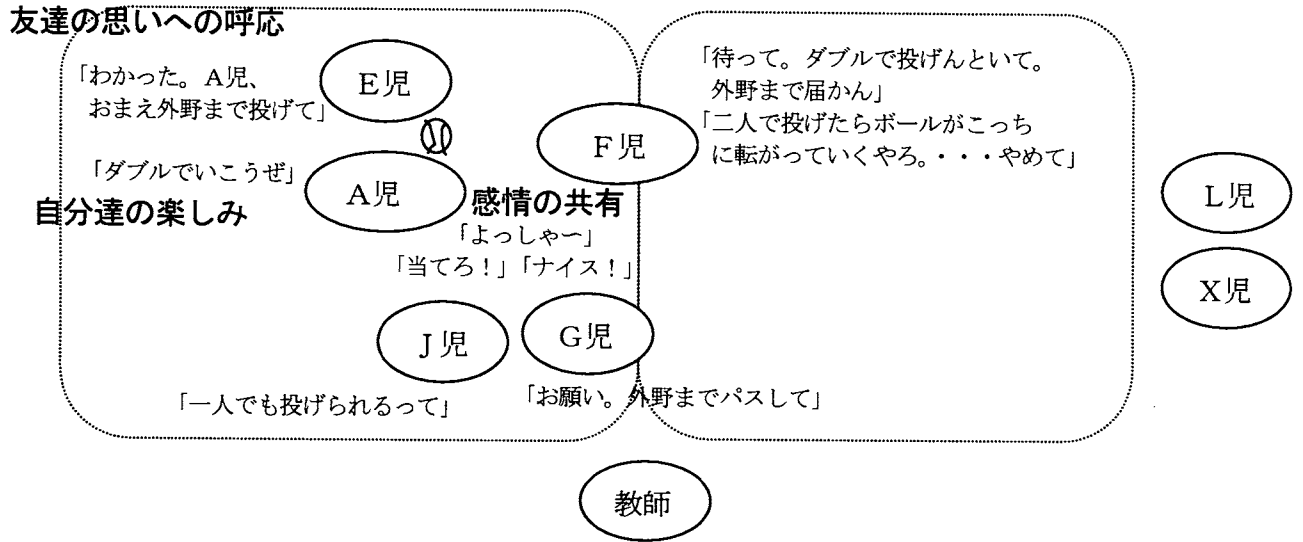
A児 「よっしゃー」

G児、F児 「ナイス！」

J児 「当てる！」

それぞれが叫びながら、L児が投げるボールの行方を気にしていた。なかなか当てられずにボールが外野と内野の間をいったりきたりしたが、その間もA児は「L児に投げたら、当ててくれる」とつぶやきながらプレーしていた。ボールを手にしたE児も大きく外野まで投げ「当てろー」「おっしいー」など外野の仲間が復活することを応援しながら試合を楽しんでいた。

## ＜友達とのかかわり＞



### 4. 考 察

#### (1) この事例からわかる幼児らの学び

##### ①友達の考えを受け入れながら遊び続けた満足感

E児とA児はこれまでもボールの取り合いなどでトラブルになり、お互いにイヤな思いをしていた。F児ら周囲の幼児もトラブル解決のため遊ぶ時間がなくなり快く思っていなかった。トラブルになると遊びが面白くなるという経験の積み重ねが、自分の思いも主張しつつ、相手の思いも聞こうとする姿勢につながったと思われる。

##### ②気の合う友達と力を合わせて活動をすすめる楽しさ

2年保育児のA児、E児は、それまでの試合の中で「ダブル投げ」というボールの取り合いをせずすむ、二人で楽しむ投げ方を考え出した。「パワーをあげる」「二人ならもっと強く投げられる」と、自分達のイメージで友達と一緒にすることを楽しんでいる。そこには、生活の中での机運びなど、友達と力を合わせると上手くいくという経験から、ボールを投げることに關しても力を合わせることがよいことだと考えているのではないかとと思われる。

##### ③いろいろな友達と目的を共有して活動する楽しさ

A児はリレーやドッジボールを始めたばかりの頃、お腹や足などが痛いと言って参加しないこともあった。運動することに苦手意識をもっているように思われる姿がよく見られた。そのようなA児が友達の期待に応え、ボールを外野まで投げる事ができた。外野のL児にボールが届いた瞬間の「やったー」「ナイス」という自分の行為をみんなで喜び合う体験は、A児にとって初めてだったかもしれない。その後の「L児に投げたら、当ててくれる」と自分なりの役割を見つけ意欲的に球技に取り組む姿を教師は初めて見た。他者とのかかわりの中でA児は友達と同じ目的で遊ぶ楽しさを感じていると考える。

## (2) 環境の構成や教師の援助

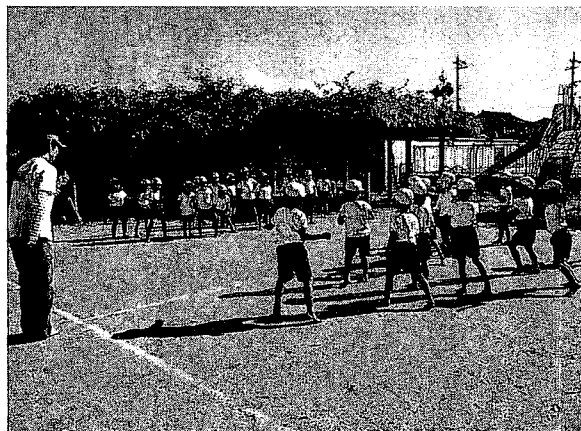
### 勝敗のある遊びでの審判的役割をする

5歳児の2学期になり、普段の自由遊びの時間にも、サッカー、リレー、ドッジボールなどの勝敗のあるゲームにも興味をもち、遊ぶようになってきた。けれども、チームの決め方、ルールなどでいざこざが生じ、楽しい雰囲気遊びを続けられないことも多い。

教師がドッジボールを紹介したとき、クラスの中にはドッジボールがどんな遊びかを知らない幼児もいた。そこで、教師が審判役をし、幼児らとルールを確認しながらゲームをすすめてきた。繰り返しゲームをすることで、ドッジボールの楽しさやチームみんなで力を合わせて勝つ遊びの醍醐味などを幼児らは感じ始めているように思う。教師が審判役として一歩引いたところで幼児の姿を見守っていることで、ルールに不安を持ちながら遊び始めている幼児らも、安心して自分なりの楽しみ方を見つけていけるのではないかと考える。

## (3) 今後に向けて

今後も、友達やクラス、学年での遊びや活動の中で、その集団における自分の役割を見つけること、お互いの役割を尊重し合うこと、みんなで喜びを分かち合うことなどの体験を多く積めるように支えていきたい。



## 5歳児 VI（V）期 友達と共通の目的をもち、力を出し合って生活を進めていく時期

### 1. キーワード 支え合い、友達からの評価

### 2. この事例を選んだ理由

表現会で「海賊王を目指して」という自分達でつくった劇を演じようと、幼児らがそれぞれの海賊の役に分かれてグループで練習をしていた。自分なりの表現の仕方を考えてやってみると、友達から評価され、自信をつけながら活動をすすめていった事例である。

### 3. 事 例

#### 事例4 表現会への取り組み

1月21日（木）

海賊の見習い役のQ児、P児、C児、O児、R児は、側転と逆立ちの修行をして世界一高いエベレストの山を制覇する演技を劇の中で演じようとしていた。

R児 「よし、できた」

壁に向かって逆立ちの練習をしていたR児が声を挙げた。すぐにP児が同じように手をついて足を振り上げた。しかし、肘が曲がり体重を支えきれずにくずれてしまった。

C児 「次、俺の番」

C児も手をついて足を振り上げるが、あまり足を上げることが出来なかった。続いてQ児、O児も挑戦したが二人とも前に転がってしまい逆立ちにならなかった。R児は2度3度と成功するが、他の幼児は上手くいかず、練習を続けていた。

教師が他の種目の補助に行き、しばらくして戻ってくるとP児が壁に向かって逆立ちをしていた。その周りでC児、O児、R児、Q児がP児の足を壁から離れないように持とうとしていた。

R児 「もう少し上まで（足首が）来たらできるって」

C児 「P児、足伸ばして」

持ち上げていた4人の力でP児の足が上がった。4人が手を離していくと、ぐらつきながらも自分の力だけで逆立ちができた。

Q児 「よっしゃー。できてるよー」

2、3秒してP児は崩れ落ちたが、5人は「ナイス」「イエーイ」とハイタッチをしながら喜び合った。

P児 「足持ってもらったら、（逆立ちの状態で）とまることができた」

R児 「じゃあ、他の人も交代にキャッチしようぜ」

お互いに顔を見合ってニヤリとした。

Q児 「いいねえ。逆立ちした人が、次、キャッチしたらいい」

C児 「（ローテーションを組んで）回ればいいよ。並んでやってみよう」

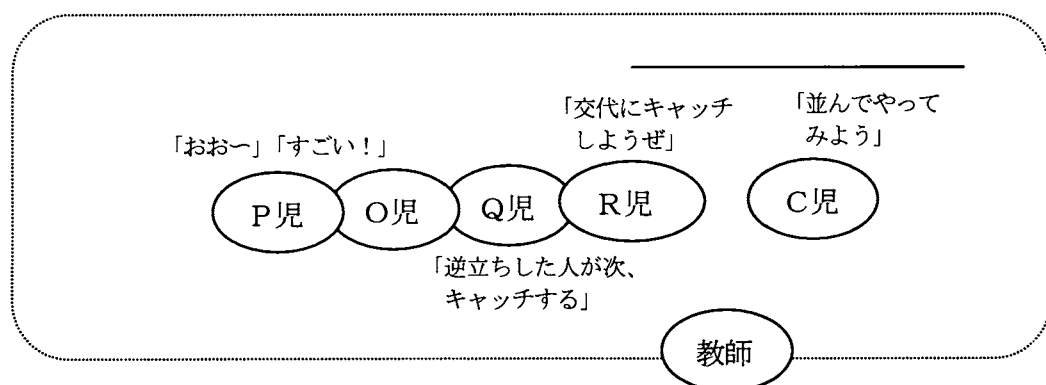
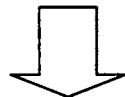
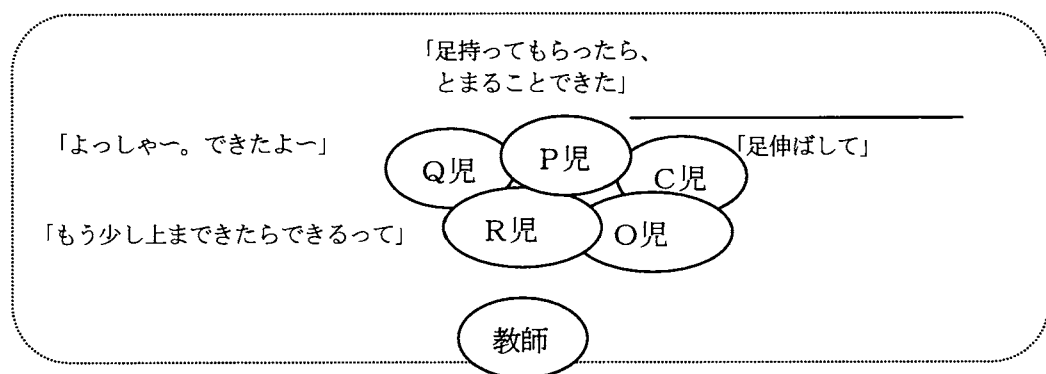
C児がR児に「来い!」と言うと、手で受ける格好を見せた。R児はC児の前に手をつき、逆立ちをした。C児は足を受け止め、ふらつきそうになりながらも安定させようと一生懸命だった。

Q児 「じゃあ、次、俺ね」

Q児はR児の前で手を着くと、さらに頭頂も床に着けて3点倒立の姿勢で足を振り上げた。R児に足をキャッチしてもらおうと、Q児は手を左右に開いて頭だけで身体を支持するポーズをとった。「おおー」「すごい！」という声を聞き、Q児は得意げな顔をしていた。P児は自分の番になるとQ児の真似をして、頭だけで支え、ポーズをとっていた。

その後も交代交代に逆立ちをしていたが、Q児はとても張り切って「もっとゆっくり足上げんとキャッチできん」「足首よりふとももを持つといいよ」などと言っていた。他の幼児も「降ろすとき言ってよ」など答えながら劇の練習をすすめていった。

### <友達とのかかわり>



#### 4. 考 察

##### (1) この事例からわかる幼児らの学び

###### ①自分なりのやり方を友達が認めてくれた嬉しさ

Q児は、それまで1度も逆立ちを成功していなかったが、足を持ってもらうことで逆立ちすることができ、さらに、床から手を離して頭だけで支持しながらポーズをとった。その時に周りの幼児が「おおー」「すごい！」と声をかけ、さらにP児が自分の考えたことを真似てくれたことで、友達から認められた嬉しさを感じていたと思われる。友達から評価されたことで、その後Q児は友達に対して積極的に声をかけていた。

###### ②自分達で共通の目的に向かって取り組んでいる充実感

P児は足を友達に持ってもらうことでそれまで壁に向かってしようとしてもできなかった逆立ちができた。その時、P児ができたことを周りの幼児と一緒に喜んでいた。劇の同じ海賊の役として繰り返し練習をしてきた仲間の中に連帯意識がさらに高まり、共通の目的に向かって取り組んでいる充実感が伺える。

##### (2) 環境の構成や教師の援助

###### 自分達で責任をもって活動する場

世界中を旅しながら修行をし、本物の海賊王になるという「海賊王を目指して」の劇は、ストーリーもキャストも自分達で相談して決めてきた。これまで、時々、遊びの中でも前転や側転などをしていたP児らは、劇の中でも海賊が側転と逆立ちの修行をすることに決めた。自分達で決めた役であるからこそ、すぐに上手くいかないことにも繰り返し挑戦し、考えを出し合いながら活動をすすめることができたのだと考える。

##### (3) 今後に向けて

園生活も残り少なくなり、修了式に向けての取り組みなどクラスや学年全体での活動が多くなってくるが、それらの活動に対しても幼児らが充実感や達成感を味わえるように、振り返りの視点を共通化したり、幼児ら同士で振り返ることができる場を設けたりしていく。

## ＜一年をふりかえって＞

### 1. 協同して遊ぶ姿における学びについて

#### (1) 一人では味わえない様々な感情の体験

5歳児になると、遊び自体のもつ楽しさ、満足感、達成感だけではなく、一緒に遊んでいる友達の姿から、充実した感情を味わっている。友達と力を合わせて遊びの場をつくり、イメージを共有して遊びをすすめる楽しさ（事例2）のように関係ができて友達と遊ぶ楽しさを十分に味わうだけでなく、自分と異なる友達の考えを受け入れて遊ぶ楽しさ（事例3）や、いろいろな友達と目的を共有して活動をする楽しさ（事例3）も味わっている。また、自分なりのやり方を友達が認めてくれるなどの友達の評価は、自己を認められた嬉しさとして次の活動も自分達ですすめていこうとする意欲となっていた（事例4）。このように、一人では味わえないいろいろな感情を味わっていくことで、友達との関係が深まり協同して遊びをつくっていく姿につながる事がわかった。

#### (2) 自分の置かれている状況に向き合い、乗り越えようとする事

5歳児になると、自分達の遊びだけでなく、園の行事の運営などにも携わるようになる。場の状況を感じ、一人一人が精一杯の力を発揮していく姿が見られる。時には、自分の思いや考えを出して状況を乗り越えていく難しさ（事例1）を感じることもある。しかし、友達と目的を共有して活動する楽しさを味わっていくことを繰り返し、友達と力を合わせてやり遂げた満足感などを味わう姿につながっていく（事例4）。このような体験の積み重ねが、自分の置かれている状況に向き合い、乗り越えようとする学びとなる。

### 2. 環境の構成と教師の援助について

#### (1) 環境の構成

##### ①興味・関心が集約される魅力的な素材や遊具

一人では扱えず協力を必要とする大型な素材、これまでに使ったことがない素材、少し危険を伴い集中して扱わなければならない用具は、幼児らの興味関心を共通なものにし、かかわりながら、遊びをすすめていた。人と力を合わせなければならないものを環境として設定していくことも協同する姿につながっていく。

##### ②思いを伝え合わなければならない状況づくり

5歳児にとって、いろいろなグループでの活動を取り入れていくことも大切である。チームで勝ち負けを競ったドッジボールでは、普段余りかかわらない友達の考えも受け入れる姿が見られた（事例3）。同じ役の友達と劇が進むように演技を考え合う姿も見られた（事例4）。逆に、思いを出すことが苦手な幼児らでグループを意図的に編成し、自分の思いや考えを出さなければならない状況を設定することも、時には有効である（事例1）。一人一人の育ちを見通し、活動に応じてクラスや係、チームなどいろいろなグループを編成し思いを伝え合わなければならない状況をつくっていくことが、協同して活動をすすめていく姿につながる事が見えてきた。

## (2) 教師の援助

### ①モデルとなる教師

5歳児にとっても、一緒に遊ぶ教師の姿は遊びのモデルとなる。難しいことや危険なことを一緒に作りながら製作技術を示す教師（事例2）がいることで安心して遊びに加わったり、教師の真似をしながら自分なりのやり方でやってみたりする姿が多く見られた。少し高い技術を示しモデルとなってくれる教師の存在も、かかわりを促していく。

### ②ルールのある遊びの審判役

5歳児はサッカーやリレー、ドッジボールなどルールのある遊びにも興味を示す。しかし、幼児らは自分ではルールを守っているつもりであってもできなかったり、勝ちたい、ボールを触りたいという思いでルールを守れなかったりする姿が多く見られる。そのような育ちの5歳児であるからこそ、教師がルールのある遊びの審判役として公正にかかわったり、いざこざを一緒に解決しようとしたりすることが、友達と思いや考えを出し合いながら遊びをすすめていくために大切であると感じた。

## 3. 今後に向けて

5歳児は、友達と一緒に活動を勧めていく中で、様々なことを総合的に学んできている。小学校でそれらの学びがどのようにいかされているかを見届け、今後の保育に活かしていきたい。